



我が家の経済学

東京都・筑波大学附属中学校 1年 牛嶋 友誠

我が家には『お父さん銀行』という、僕のための銀行がある。父にお金を預けると毎月利子が付くという、本物の銀行と同じシステムになっている。この銀行は、僕が小2の時に開設され、今に続いている。

僕が小数点を習うまでは、計算し易いように月1%の高金利で運営してくれていたが、4年生頃からは月0.1%になってしまった。それでも1年間に1.2%の金利、出し入れ自由なため、一般の銀行に比べるとかなり優遇されている。

小2の頃、あるゲーム機が発売された。両親にねだったら、ゲームは反対と一蹴された。ではサンタにお願いしようと思ったら、うちに来るサンタにはゲームは持って来ないようにお願いしてあると言われた。普通なら、お年玉を使うところだが、我が家は、紙幣は全て郵貯に預けることになっているのだ。この貯金は、将来の僕の運転免許取得資金らしい。結局、僕が自由に出来るお金は、毎日お手伝いをしたら得られる月300円の小遣いと、たまに会う祖父母からの小遣いだけなのだ。

そのゲーム機は2万円。僕にとってはとんでもない高額商品だ。でもどうしても欲しかったので、コツコツコツコツ『お父さん銀行』に預け続けた。そして、ついに2年半かかって、念願のゲーム機を手に入れた。あまりの嬉しさに泣きそうになった程だ。あの時の達成感や幸福感は今でも覚えている。

『お父さん銀行』では外国為替も扱っている。小5の頃、外貨取引に興味を持った。円高の時に外貨を買い、円安の時に売ると儲けが出ることが分かり、ポータブルオーディオプレイヤーが欲しかった僕は、何とかこの手を使えないかと思った。ちょうどその頃は、リーマンショックからアメリカ経済が立ち直りかけており、ドルの買い時は今だと感じた。そのことを父に話すと、『お父さん銀行』で外国為替を扱うことを提案してくれた。当時、1ドル85円。僕は200ドル買った。もっと円安になればかなり儲けられるぞ、とわくわくしていた。





そこに、2011年3月11日東日本大震災が起こった。日本にとって悲劇的な出来事だが、他方理論的には「日本売り」で円安ドル高が進むのではとの期待もあった。ところが実際はドルの価値はみるみる下がり、1ドル70円台に突入した。この時僕は、投資には多大なリスクが伴うことを学んだ。

それから早2年、最近ではアベノミクス効果で、円は100円台まで下落し、その恩恵を受けて経済も上向き傾向となった。その時、僕はドルを売り、3,000円のアベノミクスの恩恵を得て、ポータブルオーディオプレイヤーを入手した。それ以上に、世界の動向に目を向けるようになったことが一番の収穫かもしれない。

中学生になる頃、また欲しい物が出来た。それはスマホだ。母は小1から使っているキッズ携帯で充分だと反対だった。父も、スマホは買えば終わりではなく、月々の支払いが高額になるから駄目だと言った。そこで、バス通学をやめて徒歩通学にして定期代の7,000円をくれるように頼んだ。初めは難色を示していたが、ある条件をのむなら、と譲歩してくれた。それは、7,000円のうち3,000円を今までの携帯代とスマホ代の差額として払い、残りの4,000円を小遣いとする。その4,000円で交遊費やら文房具代やら全てをやりくりする、というものだ。小遣い300円が4,000円になり、スマホも持てる、と即快諾したが、それは甘かった。新学期は予想より文房具代がかかり、映画に行けば昼食代や交通費などで3,000円近くの出費。夏休みともなると、あっという間に小遣いは消え、今では『お父さん銀行』の預金を切り崩す竹の子生活だ。

しかし、こんな厳しい生活をしているからこそ、自分の行動に変化が生まれている。駄菓子を買わなくなったし、遊園地に行く時はクーポンを探してみるなど、主婦的な感覚が身についてきた。甘やかされて何でも買ってもらえる子が羨ましい時もあるが、僕には着実に一人で生活して行く力が付いてきていると感じる。苦勞をしないとお金は稼げない。苦勞して稼いだお金は、本当に欲しい物や、やりたいことに使いたいと思う。有意義に使った時は、満足感や充実感が心にしみ渡る。

両親の行ってきたお金に対する教育は、僕が自立した大人になるための大きな助けとなっているに違いない。

なお、『お父さん銀行』は、今年から株式の取扱いを開始した。これは預金の





利子にあたる配当金に加え、株主優待券というおまけまで付いてくるものもある。魅力的な物だが、一つ間違えると大きく値下がりして「元本割れ」すなわち元のお金より減ってしまうという、更に大きなリスクを持っている。

これに飛びつくか否か、僕の今の悩みどころである。

